

沢木欣一

の生涯と仕事


 白鳥
金子兜太

追悼大特集 沢木欣一の生涯と仕事

沢木欣一と私は同じ大正八（一九一九）年の生れで、付き合っても二十代の初めの大学生のころから長い。晩年、愛妻の細見綾子を失い、自身は入院中心の生活を余儀なくされたあとも、テレビにいつしよに出演したりしてきた。テレビといえば、最後は鼻孔に管を入れた状態で出演し、ときどきふらつきながら、それでも辞めるとはいわずにつとめていた。若いころの肺結核でしだいに活動不如意になっていた肺臓を抱えているにもかかわらず、タバコを止めなかったことも記憶に残る。ヌーボー然としていて、口の重い男だったが、ときどきカッと怒り、おどろくほどシヤンとしていた。一種の大物ということなのかもしれない。とにかく妙に魅力のある男だった。

この大物という感触は、俳誌「寒雷」を創刊したばかりの加藤楸邨師にもあったようで、創刊の翌年（昭和十六年）あたりに一投句者として参加した私たち——だいたいそのころに、同年代の沢木や原子公平、安東次男、

菊池卓夫たちが入会している——と話すとき、沢木をはめる言葉がしばしばでていた。私の記憶にある話としては、楸邨師と沢木が新潟のほうに旅をしたときのことがある。二人は同じ蚊帳に寝た。その蚊帳のなかで、沢木は寝床の上に胡坐をかけたまま師と話すこともなく、なにか読んでいる。ぬーと、もさっと読んでいたので、師が少し気にして覗き込むと、当時出版されたばかりの中野重治『斎藤茂吉ノオト』だった。「話もしない、寝もしないで、読んでるんだよ」——そう語る楸邨師の顔付からは「愛弟子」への情が伝わる。楸邨門の兄弟子という感触といいかえてもよいが、それは、原子公平が母といっしよに住んでいた小石川・原町のアパートに遊びにいった、そこでしばしば沢木と出会うときにも同じだった。沢木も母とともにそこに暮らしていたのである。原子を訪ねると、しばしば原子や沢木の学友たちが集っていて、あれこれと議論していた。立上って喋る者。中腰になって手をふって喚く者。正坐のままゆっくり話す

者。あのタバコの煙で白っぽくなった部屋の情景はいまでもはつきり目に浮ぶのだが、そして、部屋の隅にちょこんと座って、その様子をニコニコしながら眺めていた

原子の亡母の姿もはつきり浮ぶのだが、その真ん中に、胡坐をかいて、腕を組み、顔を俯け気味にしていた沢木の姿もありありと浮ぶ。ほとんど彼は喋らなかつたように思う。しかし、彼が真ん中にいるために、議論は弾んでいる印象だったのだ。まるで沢木というトーテムポールを、ぬっと真ん中に立てて、そのまわりを人々がぐるぐる走り廻っている印象といってもよい。これをして兄貴分というのか。

戦後逸早く、金沢に両親とともにいた沢木は、俳句同人誌「風」を創刊した。昭和二十一（一九四六）年のことである。「俳句における文芸性の確立（人間性の回復、新しい抒情の解放、直面する時代生活のいつわらない表現）」を目標にかかげていて、その新鮮なデビューは早くも俳壇の注目を集めるところとなっていたのだが、丁度その頃、私は勤め先の用事で金沢を訪れ、沢木の家に数日泊めてもらったことがあった。細見綾子はまだ丹波にいて、金沢に来ていなかった時期である。私は、「風」への参加を決めていた。先ほどの「寒雷」同期生といえる連中はすでに俳句や評論を旺盛に書いて、「風」に発表していた。私には沢木の気構えへの関心があり、南方の

島で、いわゆる「バパイア」になっていた、頭のぼけに生気を注入したいと願っていたのである。

しかし、沢木は学生時代とすこしも変わってはいなかった。数日のあいだ、彼は私を「風」の同人たちのところに連れていってくれた。黒田桜の園、中西鋪土、中山純子に初めてお目にかかったのもそのときである。長老の西村公鳳にもお目にかかったと記憶するのだが、その後、「風」全国俳句大会などでしばしば出会っているうちに、初見のことがあいまいになってしまった。

黒田、中西、中山の印象は鮮やかで、沢木がこういう個性十分な才能と同じ街に住み、同じ俳誌で接触していることで、私には安心する気持があったことを思い出す。北陸の地で一人では、と思うところがあったのだろう。しかし、沢木本人は相変らずだった。ほとんど口をきくことはなく、胡坐をかいて、のそつとそこにいて、ときどき大きく口を開いて笑い、ときには同じくらい大きく口を開いて欠伸をしていた。「なあ欣一さん」などと、年齢では先輩になる黒田や中西が話しかけても、確な返事はしなかつたし、話しかけたほうも気にする様子はなかつた。そして、その座はじつくりと落着いていて、時間の経過を忘れるほどだったのである。

沢木欣一のこの人間像は、私のなかでいまでも変わっていない。したがって、彼が第二句集『塩田』（昭和三十一年

一九五六年の「あとがき」に、自分は「資質について（中略）石田波郷氏に最も近親を感じる」と書いていることを諸うのである。二人とも長身でヌーボー然とし、そんなに喋らないが、座の中心にいる雰囲気では共通していた。そして清潔を感じさせる抒情がある。沢木が同じ「あとがき」で、「郷里北陸の風土によせる多くの素朴な思慕」といい、「雪白」「塩田」、白く清潔なものにはあこがれているようだ」ということにも肯きつつ、やはり波郷に似ていると思っている。次のような第一句集『雪白』のなかの句を、私はそうした沢木欣一の影像と重ねつつ、いまでも愛している。

四高卒業金沢を去る（二句）

雪しろの溢る、ごとく去りにけり

白梅に別る 檻樓の一抱へ

出雲崎

天の川柱のごとく見て眠る

丹波に細見綾子を訪ねて

実となれる 梨の根株の泉かな

「出雲崎」の句は、先ほど書いた、楸師に同行のときのものではないかと思う。

沢木欣一は俳句をどう受取ってきたのか。そのことについての私見を述べたい。

沢木には、細見綾子との結婚にいたる内的経緯につい

て告白風に書いた小説『踏切』がある。そこで彼は、戦時の高校（旧制四高）の終りから大学にかけての、自分と俳句との付き合いについてこう書いていた。

自分がその時期俳句に熱中したのは、「忌むしい現実から自らを遮断し、心の片隅に残されたかすかな美、感覚、趣味をすべての支えとして消極的に暮すことが最大の抵抗だった」「そういうのはかない超越的な生き方（それを「泡沫」ともいう）」を「大事に愛し止めて置こうとした不安の予感から」だったというのである。何もしない。のそつと耐えている。そして、同じように俳句に熱を入れていた連中とともども、「感受力は繊細に／＼磨かれ、皆泣く／＼なっていたようだ」ともいう。

しかし、戦後は変わった。いや変らざるを得ない。戦後のいまは、「掌の中の胡桃をなで廻して磨き、光沢を出すことは止める。胡桃の殻を握りつぶせ、噛み割れ」と自分に言いしかせる。あくまでも「自分」の出發としてそう決断するようになっていたのだ。したがって、安全弁のように結び付いていた俳句への関心も変っていた。沢木は率直に書いている。俳句は「皮膚の表面をかいなでゆく微風の触感の切り売り」で、すべてが骨身にこたえることがない。「やくざだ。人間を駄目にしてしまふぞ」とまでいう。

それではなぜ「風」を創刊し、そこで「社会性」につ

いてのオビニオン・リーターの役割までも演じようとしたのか。自身、「社会主義的イデオロギーを根底に持った生き方、態度、意識、感覚から産まれる俳句」が「社会性のある俳句」なのだ、と言いつつ切った理由は何だったのか。なぜ俳句を捨てなかったのか。

「やくざ」なものだからこそ、逆にこれに執して、「文芸性の確立」をもとめ、「社会性」を人一倍もとめる、ということだったのだ。学生時代に結びついた俳句への愛着を手離せなかったということもあろうが、それ以上に、「やくざ」な俳句にむかって覚醒を呼びかけることによって、戦後の自分にむかつての「胡桃の殻を握りつぶせ、噛み割れ」という自己励起の姿勢を實現したかったのだ。俳句より自分。しかし俳句を励ますかたちで。

その自らを励ましつつ生きようとする基本姿勢のなかで、たとえば、能登塩田を訪れ、人と大地が直接に結び合って形成する風土に立入るとき、「社会性」への指向を超える自己励起として、風土への情熱がさらに肉厚に高まることになる。第二句集『塩田』は、「社会性」実現の顕著な一姿であるとともに、「風土」に身をのめり込ませてゆき、後に『沖繩吟遊集』などを生む作風形成への端緒でもあって、「あとがき」に彼はこう書くことになる。

「文芸のなかで最も遅れているといわれる俳句を製作し、俳句にかかわるいろいろな世界を通して、ぼくは日本文化の実状に実地に触れることが出来たことを喜ぶ。そしてその最も遅れたところから民衆の一人として一歩一歩発展していくことに勇氣を感じる。ぼくは自分が小市民インテリゲンチアであることを確認し、その役割りを考えている」

私はこの文章が、沢木の「社会性」以後の、いわば再出發の弁となつていてと思つてゐる。東京に移つて文部省（当時）につとめ、やがて芸大教授に就任する過程のなかで、「風」を同人誌から主宰誌とし、しかも主宰を細見綾子にまかせた感を抱かせるほどに退いていたのも、「美しいということ」を自然と同意語に考えている「妻こそそれにふさわしいもの」と考え、自身の「役割り」を社会的職業に傾けていたのだと思う。そこでは俳句における特段の自己主張は遠のく。「社会性」との縁も消える。

大学教授が停年となり、細見綾子死去のあとは、「風」主宰に自分の「役割り」を戻すが、その期間もそう長くはなく、淡淡としたものだった。大往生というべきだろう。沢木につぎの句がある。

八雲わけ 大白鳥の行方かな



追悼大特集 沢木欣一の生涯と仕事

練達の俳人沢木欣一 杉橋陽一

■沢木欣一の句誌「風」の主張

沢木の「風」の創刊は戦後いち早い昭和二十一年五月で、まだ俳人たちの星雲状態の集合体であった。沢木が「寒雷」に投句していた時代の、安東次男、金子兜太といった仲間、あるいはかつて「倦鳥」で細見綾子とともに青々の指導を仰いだ右城暮石、古屋ひでをも同人として参加していた。それぞれがあとで自分の世界をつくりあげていった錚々たるひとびとである。創刊の辞において彼は、「文芸性の確立」「生きた人間性の回復」「新しい抒情の解放」などを高らかに目標として掲げた。編集同人は沢木のほか、原子公平、中西舗土や黒田桜の園など。

同じ頃、東京三（のちの秋元不死男、富沢赤黄男などが新俳句人連盟を立ち上げ、俳壇の戦争責任の問題に取り組みはじめたし、草田男も楸邨の戦時中の発言などを

批判し、それ以前の体制を一新しようとした。桑原武夫の「俳句第二芸術論」が各所に論議を起したのもこの頃である。ところが軍国主義を支えた意識を洗い直そうとした俳人たちの新たな動きは、米ソ冷戦に巻き込まれ、アメリカかソ連かという単純な二者択一しか、選択肢がなくなったのである。

■そのキーワード「社会性」

昭和二十八年には内灘に米軍射撃場がつくられることになり、それにはたいする反対闘争がはじまった。金沢大学の講師になっていた沢木は、学生たちといっしょに現場に行っただけでなく、昭和二十九年の「風」のアンケートで沢木は、おおよそ「社会主義的イデオロギーを根本に持った俳句」が目指すべきものだとして述べ、意気軒昂なところを示した。作品では三十一年の句集「塩田」が、こうした方向の結晶とされる。

塩田に百日筋目つけ通し

「塩田」の句は欣一の仕事を見るばあいどこでも挙げている。この句集は、彼は間髪を入れず時代の求めに応じて出したもので、実際、時代のうねりに見事波長が合致したヒット作である。

沢木の回想録『昭和俳句の青春』は、彼が投句をはじめた昭和十四年頃から、「風」を立ち上げた少しあとの昭和二十二年、三年までの事象で終わっていて、実践的な「社会性」にかかわる時代には至っていない。「あとがき」には続編が予告されたが、結局書かずじまいになった。なまなかでは解きがたいこの「社会性」俳句の矛盾を、沢木はどう説明できただろうか。説明のしようがなく、したがって書けなかった。単純な理屈から押されたら返答のしようがない性質のものだからだ。彼にとって現実はずねに不十分きわまりなく、ときおり命令形で呼びかけられるべきものである。

兵稚く苺つぶせり霧霽れよ

冬日逃げるな河原の穴に石取女

夏木立疾くめぐらせよ忠霊碑

ことにはじめの、昭和十五年の「兵稚く」は悲痛な情感と焦燥に満ちたものだ。つぶされた苺の果肉はミルクに浸され、幼い兵士は先の見えない霧に閉ざされる。「霧霽れよ」と思わず沢木は叫ぶ。見通しの利かない蒙

昧な世界にいるからこそ、兵士は、自分でもわからない苛立ちに振り回される。

昭和三十年作の二句目は、自註によれば、福知山線沿線での囑目。この時期、過酷な労働にたずさわる女性の姿がたびたび登場する。きつい労働に従事する男も出てこないわけではないが、やはり圧倒的に女性が多い。短い冬の日、「河原の穴」で採石作業をしている女性のため、「冬日逃げるな」と命令する。束の間の暖をもう少し保ってくれ、と彼は祈るのである。とくにこの句は、彼の母ものの秀句、

雪の底眼を病む母や雛祭

と構成上類似している点が多い。女性が凹所に蹲るという構図が基本になっており、しかもこの構図と絡まうて、沢木作品の女性はいくつかの社会的抑圧をこうむっている存在となるのである。いうまでもなく「河原の穴」は物理的に女性と深くかわっている。石取女は、労働者として、女性として、二重に抑圧されたものである。

しかし、沢木の独自性は抑圧の観点からのみ女性にこだわるのではなく、自らの性的憧れともいべきモチーフをここに潜ませたことであって、後年彼は、「地聲」以降、徐々に正面からこのモチーフと取り組むようになった。

三句目は昭和四十九年の『沖繩吟遊集』所収。この句

沢木欣一

の生涯と仕事

集は誓子の『黄旗』を意識した、宿願の書下ろしである。沖繩戦で斃れた者たちへの鎮魂がテーマになっているので、夏木立はやくそれを覆って木陰をつくってやってくれ、と祈願するのである。

この三つの命令形を含む作品の中でも、はじめの『霧』は日本の蒙昧な軍国主義のメタファーであろうが、句の光景にはリアルに重苦しく霧がたちこめている。たんなるメタファーを越えた実際の重みがある。これが沖繩の句になると、たしかに沖繩にたいし苦悩を強いている状況への抗議の気持ちは感じられるが、しかし、初期とは明らかに異なる、ある種の軽やかさが全体に見られる。

■沢木の「自然」

今見たように、沖繩の忠霊碑が十分な休らいをもつには、沢木においては夏木立や忍冬花を必要としている。死者の魂は自然につつまれて慰いをもつのだ。しかし同時に、この同じ自然が人間のむなしき営為を嘲笑するのである。たとえば、米軍の内灘射撃演習場が作られ基地反対運動がもちあがったとき、昭和二十八年の作を見てみる。

鉄板路障間夏草天に噴き

中七まで助詞がなく、名詞の羅列になっている。鉄板

を敷き詰めた道路が拵えられたとて、その間からは夏草が盛んに伸びて、「天に噴く」勢いである。これが、

夏草や兵共がゆめの跡 芭蕉

を踏まえたものであることは明らかである。鉄板を敷き詰め、軍事演習をする者たちもやがては消えうせ、夏草が青々と繁茂する。彼はそうした未来を願望とともに幻視しているのである。しかも米軍演習場をなみする夏草は、ちょうど噴水のように、激しい勢いで「天」に向かってゆく。正義の秩序があるかのような、神意的意味付けをもつような「天」に向かって。昭和四十三年沖繩行の成果のひとつもこうした図柄を思い出している。

赤土に夏草戦闘機の迷彩

米軍の戦闘機が如何にも人為的に迷彩色をほどこされ、威容をほこっているが、しかし、そのそばの赤土からは夏草が生えていて、自然がコントロールされないことを示している。赤土、夏草、緑も入った迷彩色、と巧みな配置になっているこの句においても、人工物は生命力の強い自然にさらされ、脅かされている。

したがって沢木が「社会性」のもとで歌ったことからは、盟友の金子兜太とは大分違うのだ。同じように、「社会性」の——沢木の言う「神話的」な、すでに実践は終わった——激しい時期を経験したあと、昭和四十三年でも、金子は、

霧の村石を放うらば父母散らん 兜太

と、集団的なムラの心性が蜘蛛の糸のように張り巡らされた日本のありようを凝視している。この心性は飯田龍太と金子との共通項になりえようが、沢木にはおそらく希薄なものである。図式的に言う、ここに彼の朝鮮経験が入るかもしれない。

■朝鮮経験と父親

彼の父親は富山中学の国語教師であったが、当時の植民地、朝鮮に転勤した。沢木も小学校から元山中学校を終えるまでの数年間をいわゆる外地で過ごした。この点、樺太で少年時代を送った山口誓子と共通するところがあり、実際、沢木は、昭和十四年刊東京三の『現代俳句の出発』なる誓子論を通じて、誓子の樺太経験に親しみを感ずるようになり、その四年前に出た誓子の書下ろし句集『黄旗』をも知った。俳人としてのケジメを『沖繩吟遊集』でつけようと思った淵源は誓子にあり、彼の誓子へ親近感、四高生として金沢で暮しはじめた沢木が日本で違和感を抱きつつ暮らしていたことのあらわれであろう。

日本の軍国主義に対する沢木の嫌悪感は父親譲りの部分もあるようだ。父親は「軍人嫌い」で、ソウルの自宅で宴会を開いたとき、父親は突然、客の配属将校の帽子

を庭に投げつけ、「掃れ！」と怒鳴ったという。真珠湾攻撃の報を彼は金沢香林坊で聞いたが、そのときの反応は「軍人のバカが日本を滅ぼす」と思ったということであった。昭和十八年に、

鯉の背に初蝶来れば父恋し

なる句を作っている。父親に依存した自分を懐かしんでいるのだ。座五の「恋し」と上五の「鯉」とはちよつとした駄洒落である。この駄洒落は、とっさのときに父親譲りのセリフが飛びだす見方へのアイロニーかもしれない。

■細見綾子とともに

結社としての「風」を特徴づける大きなことは、「社会性」と「即物具象」を唱える沢木と並んで、もうひとりの指導的存在がいたことである。彼の妻細見綾子である。ちょうど楳圓のふたつの中心の片方のように、「風」のなかでは、沢木に劣らず、彼女は門人たちにたいし強烈な輝きを放っていた。しばしばあるように、夫唱婦随ではじまった俳句とはわけが違って、彼女は沢木とは別個のそれ自身独立した小宇宙だった。昭和十七年、沢木と出会う前に出ていた彼女の第一句集『桃は八重』を繙くと、ここに個性的目鼻立ちをもった一個の俳人があることは一目瞭然である。

結婚したとしても彼女の個性は融解するわけではない。昭和二十八年、まだ金沢在住時代の彼女の句に、
松の蕊はつきりと吾が影ある地 綾子
というのがある。彼女には、自分の場所をテーマにした句はほかにもあって、結婚前すでに俳人として一家をなしていた彼女にとって、夫の「影」の下にのみあることはとても肯んじられぬことなのだ。したがって彼が綾子と偕老同穴まで至って最後の句集を『綾子の手』としたこと自体、すでに偉大な仕事であったのだ。
二人は相当地に句風が違っていたにもかかわらず、相互影響があった。

秋晴れに甘酒啜る仏像観て
これは昭和十七年、沢木が東大国文科生のときの作。京王帝都電鉄で深大寺を訪ね、白鳳仏を拝観したあと、おそらくお寺の脇の茶店で甘酒を飲んで疲れを癒したのであろう。深大寺までは辿り着くのに随分時間がかかったようで、甘酒は疲労した青年の咽喉を快く通ったにちがいない。沢木の句を特徴づける端正さとともに、ある種の安堵感がここには感じられる。ことによるとこれは、昭和四十四年、綾子の佳句、
仏見て失はぬ間に喰喰めり 綾子
を思い出さないうか。仏像鑑賞と、そのあとの飲食物、という取りあわせではきわめて似ているが、句の

この鑑賞文では触れていないが、青々の大地は女性的である。そこにさらに山葵田の「みどり三角」を付け加えて、女体のイメージを「原始」的に子どもの無邪気さで描いて見せた。晩年の綾子もこの青々の句を思い出しているが、これまたその途方もない省略によって意表をつくものになっている。
地の胸といふ語に春の立ちにけり 綾子

■欣一俳句のうまさ

沢木は青年時代、波郷、草田男、楸邨などのいわゆる人間探求派から影響を受けた。昭和十五年暮に、高校生の沢木は、原子とまず金沢で落ち合って二人して上京、波郷と楸邨を訪ねている。また草田男の句会にも出席している。昭和十四年頃の草田男の作品、

金魚手向けん肉屋の釣に彼奴を吊り 草田男

は、発表当時から彼の気に入っていて、『昭和俳句の青春』でも多くの言葉を費やして当時の状況を回想している。驚くべきことに、沢木はそこで、この金魚を「即物具象の材料」と説明しているのである。憎悪と憤怒の塊のようなこの句がどうしてそのことばで説明されるのか。というのも彼は通常はほとんど子規的写生の同義語として「即物具象」の語を用いており、静かで端正な沢木の「即物具象」といえば、さしあたり、

感触はかなり違う。沢木は甘酒を飲みながら、静かに端正に今の美的経験を反芻しているようだが、綾子の方は、仏像——彼女の説明だと新薬師寺の仏像——を見たその感動、印象を桃を食べることでおのが肉体に収めたというのであり、きわめて直接的、動物的である。桃の果肉を裁断する彼女の歯並びから、何か肉食獣のような趣すらイメージさせる。

■綾子から青々に

綾子を通して彼は、綾子の師青々にまで遡った。昭和三十九年の、

地の胸にみどり三角山葵田は

は、明らかに、晩年の青々の秀句のひとつ、

野は焼きて地の胸ひろくなりけり

青々

の強い影響下に成り立ったものである。綾子には少ない分析的知性によって、彼は幾度か青々の犀利な鑑賞文を書いており、それはまた綾子のいわば文学的出生地をつぶさに見ることになったわけだが、そうしたなかに「野は焼きて」に関するものも含まれる。「野焼きは子供だけでなく大人もすべての人を原始にもどらせるような魅力がある。野火が枯草を燃やして、速度をもって走るのは人間の心を昂らせてやまない。(中略) 末黒野の出現によって大地が自ら胸をひろげたのだ」。しかし沢木は

■ほづきの色地にふれしところより

などがまず挙げられるからである。ホオズキは大地から少しずつその朱を吸い取るかのように、おもしろい着眼である。しかし沢木に「俳句でも相当に人間の表現が可能である」を認識させたひとつが草田男の句である。

「金魚」の句を山口青邨や松本たかしが評したように、

ここでは、むしろ坦々とした写生よりも、「生身の汗の滴りのやうな句」、「文芸的全力、全的意力」を傾注するという方向が衝撃力をもっていたのだ。戦後「風」を立ち上げたとき語った「俳句における文芸性」の確立とは、こうした人間的表現を念頭に置いていたのだ。沢木は晩年になっても「即物具象」のことばを用いながら、

草田男の句が、是認できる範囲内のものだとしていたのは興味深い。

彼は晩年に近づくにつれ子規的写生が望ましい「風」俳句の方向としていたが、たしかに彼の職人的な技巧の研を見たと、写生を主張する理由は分かる気がする。

■枯芭蕉つつ立つ八方破れかな

昭和五十八年の句である。「八方破れ」に見えながら自在さが獲得されている。しかし職人的技巧は「人間の表現」といっしょになってこそ映えるのだ。

稀有のお二人、このあとも 山田みづえ



沢木欣一氏の業績を書くつもりであった。それが俄かに追悼文に……ということになってしまった。こんなことがあるものかなかなか手につかぬ。

沢木さんには俳人協会長をやって頂いたりしたので、少々は書けそうであるが、大体男性にしては笑顔の美しい方であつたし、『塩田』『沖繩吟遊集』が何といつても印象にあり、世に有名な『塩田』もさることながら、『沖繩吟遊集』が、無関心ではいられない土地であるからいつまでも余韻を引いて私の中にただよっている。

二〇〇二年版の年鑑には、『俳句』『俳句研究』共に同じ句が載っている。慌ただしいご逝去の故だろうと思われる。綾子さんの許に俄かに旅立たれたのだと何べんも思つて、何とか胸の腑に納得させようと努力はしているが……。綾子さんの句は、殊にも初期の頃の幾多の句を記憶していつも素直に、あのお着物姿と共に浮かぶ。年鑑に見たのは欣一氏の次の五句である。

雉子鳴いて座禅始まる大寺かな 沢木欣一

「綾子をよろしくね」と言われるのであつた。こう書けば前者は綾子女史、後者が沢木欣一氏とよくわかると思う。私の掌は、心が冷たい人はかえつて手が温かいとか言う人がいるが、いつもあたたかい。綾子女史とはお会いすれば必ずといっていいほど握手で、「あたたかく柔らかい手エやねエ」とか、私の母は能登生まれの金沢育ちなので、どこやらアクセントが肖ていてなつかしい限りだった。昔は痩せてスマートだったのに両手ばかりは、いつもふつくら私の私はこんな風に握手でいろんな方の風貌に触れてゆくことが多かったと思う。

もう一つ沢木さんの印象で強かったのは、私が綾子女史と共に、あれは第一回の訪中団の一員として出かける時だった。女性四人であつたが、林火先生が団長であつたので、細見綾子と山田みづえ、下村梅子と赤松蕙子、という組合せになっていた。沢木さんがそう頼まれて組合せが決つていたようだった。私と赤松蕙子さんの二人は、それぞれ年長者、ユーモラスに表現すればお姑さんを護つてゆく形になっていた。私は若い方の人間（今に比べれば……）としてそれ位はお仕えしてもいい（日常的な暮らしの中で）といそいそとしていたのである。定型詩訪中使節とは第一回の時は別に表明しなかつたが、内容はそうだった。沢木さんが出立前に二、三度も私を捉えて「綾子をよろしくお願いしますよ。みづえ

遅々と読む善の研究小正月
病院の帰りカツ買ふ四月馬鹿
龍柱熊野の海に立ちにけり
卓に来る活字の好きなひきがへる

終りの句の卓はテラスかヴェランダに出してある卓だろうと思われる。暮よ!! お前も本を読むかと問うと、ぐびりと喉を鳴らすように答えたというか応じたのだろうかなどと面白く思つた。悠々閑々として沢木さんらしいように思われる。同好の士として遇したのであろう。

最近の句集はお二人のを共に拝見していないので、何とも言えないが、細見綾子・沢木欣一のご夫婦は、お年が大分距たりがあると聞いているのに、仲良くお互いが歩み寄るかの如く、自然体で、こんなことをわざわざ書く必要のない位、融然たる藹々たる素敵なお二人に見え、快き姿といつも拝察するのだった。そうして別々にお目にかかっても、お二人とも必ずといっていいほど、私の掌をご自分の両手に入れて「いい掌やねエ」とか

さん」と、綾子さんのことをまるで私に預けられる風だったのが面白かつた。一夜だけ私は蕙子さんと、細見さんは下村さんと同じお部屋だったが、細見さんが約束だからと次の日から帰国するまで、私がずつと二緒した。一見地味に見える細見綾子ご本人は、起居を共にしてみると、目立たぬブラウスや靴などにもお洒落というところがよくわかり、買物のセンスもよろしく、ああ、なるほど、こういうおしゃれもいいものだ私を感心させるに充分だった。私の買物まで点検してくれて、それに伴い毎晩荷物の詰め替えをして笑われたりしたこともなつかしい。私などは誰にも便りを出さないが、綾子さんはちゃんとハガキを書いて、出して来てネと遠慮なく私を使つたが、私は年上の方が好きなので、たのしく承わつた。そして約束通り、毎日うまいお茶を淹れて下さつた。

いつだったろうか。沢木さんの留守を狙つたわけではないが、佐野美智さんと私の二人で細見綾子さんのお宅へ押しかけて、炬燵にあたり乍ら、話は泉の湧くごとく尽きず、夜半帰るのが大変になるまで話し込んだこともあつた。女人の客のわるい点とい点をごちゃ混ぜにした押しかけだった。たのしいことは、その後々考えて出来ることではないのだった。どこかで妙に気の合った女人だったことにまちがいない。お二人は今でもそのまま胸中に素敵に輝やかに存在することになろう。 合掌